



巻頭言

昇堂入室のつとめ

—大阪大学産業科学研究所創立50周年を迎えて—

三角 荘 一*

産業に必要な自然科学の基礎と応用に関する理工学総合研究機関として、大阪大学附置産業科学研究所が昭和14年堺市東浅香山の地に設立されてより今年で創立50周年を迎える。無線通信、金属材料、高分子有機化合物の僅か3研究部門でスタートして以来、半世紀の変遷を経て現在21研究部門と3附属研究施設を抱える国内でも有数の大学附置研究所に発展してきた。

大学附置研究所は学部とは異なり研究主体の組織であり、特に当研究所は設立の主旨からも我が国の科学振興のため基礎研究に留まらず、産業界の科学技術を進展せしめる責務を負っている。事実、その主旨に沿って当研究所ではたえず組織の転換、充実を計り、学際的基礎研究と産業界のニーズに応える業績を挙げてきた。中でも研究所内の共同研究体制を促進させる目的も含めて昭和40年に現在の4研究部制を施行し、産業のなかでも重要な新材料・物質の開発を指向するようになったのは先賢の明と云えよう。これに続いて、近畿圏整備法の下に進められた大阪大学の吹田地区への統合計画により43年現在の地に移転したことは、学内理工系学部から遠隔の地にあった当研究所の学術研究活動を飛躍せしめる上で画期的な出来事であった。その後、部門名の一部変更、2つの材料関連附属センターの設置などを経て現在に至っている。本年11月には50周年を迎えて大阪大学放送講座（テレビ講座）を初め各種の創立記念行事の準備が目下進められている。

近年、学術と産業の新しい要請に応えるため、全国の大学附置研究所は自己評価を行い、研究組織などの転換による研究体制の整備充実、いわゆる“見直し”が求められている。私共の産

*三角荘一 (Soichi MISUMI), 大阪大学産業科学研究所, 所長, 教授, 理学博士, 有機化学研究部 半導体材料部門

業科学研究所は創設この方総合理工学研究所として歩み続け、目的研究所のような固定したプロジェクトを持たずに現在に至った。これは、科学技術の進歩が目覚しい現今ではむしろ総合研究所の特性を活かし、時代に即応した共同研究を行うことによって活性化を計り得るとの識見に外ならない。実際、近くは昭和58年より半数以上の研究部門を核として、学内共同施設である放射線実験所と材料高圧合成センター（現高機能極限材料研究センター）および材料解析センターなどの附属施設も加えた推進研究（文部省特定研究）を実施し優れた業績を挙げてきた。また、昨年には大多数の研究部門と3研究施設が参加した第2期の推進研究「知的材料設計と新素材の創出」をスタートさせたばかりである。研究所活性化のその他方策として、研究所の将来構想、組織再編などの検討を進めている。

最初にも述べたように、当研究所は関西財界の要望により基礎と応用の両面を指向した研究所として設立されたのであるが、この半世紀間に興った我が国科学技術の目覚しい革新の結果として、改めて大学における基礎研究のあり方の“見直し”が迫られている。すなわち、科学技術先進国と自負するには我が国の基礎研究における独創性の貧困が今問われているのである。これについて福井謙一先生が著書「学問の創造」の中で、“すぐれた応用研究をするための基礎研究には基礎学問の訓練がなければならない”と述べておられ、先生がイソパラフィン炭化水素の化学工学研究からフロンティア軌道理論を完成するに至った経験に照らして基礎研究の重要性を日本の研究者の多数に問いかけておられる。我々堂に昇った（学問、芸術の道に入った）研究者は更に基礎研究の奥義を極める、すなわち“室に入る”ことを常に心せねばならない。